

〔達職〕

ポラトネス理論の展開



宇佐美まゆみ

(うさみ まゆみ)

7

21世紀の対人コミュニケーション研究 の展望

——デイスコース・ポラリティス理論構想(1)——

一 談話のプライトネスとは何か

「談話のポライトネス」の重要性が指摘されて久しい。本連載の前半で触れたレイコフやリーチ、ブラウンとレビンソンなど語用論的ポライトネスの理論の提唱者たちも、皆、ポライトネスと談話レベルの要素が関係していることに言及している。よく指摘されるのが、依頼などの発話行為では、「くしていただけますか?」「くしていただけますか?」「くしていただけるとありがたいのですが」などの言語表現自体の丁寧度の問題もさることながら、実際の依頼発話に持つていくまでに、適切な挨拶や前置き、依頼理由の説明があるかどうかというような「談話レベル」から見た発話連鎖の適切性が、実質的ポライトネスに重要な役割を果たしているというようなことである。つまり、教師の研究室に入って、いきなり「推薦状を書いていただけると大変ありがたいのですが。」とだけ言うわけにはいかないのである。

また、一般的な意味での「談話のポライトネス」としてイメージしやすいのが、話題の導入の仕方や頻度、話題の管理などにかかわる問題である。例えば、会話という相互作用活動にありながら、相手が提出した話題を無視して突然話題を

変えるというようなことは、ポライトでない、つまり、失礼だと捉えられるのが一般的である。また、人の発言途中に割り込んで発言を奪ってしまうということも失礼だと捉えられる。

これら二種類の例は、「言葉使いの丁寧度」というよりは「発話内容」や「発話の切り出し方」にかかわる問題となる。従来の「言語形式自体」の丁寧度の順位付けと体系化を目指す立場では、「発話内容」や「発話の切り出し方」などは扱ってこなかった。それには一理ある。実際には、非常に丁寧な言葉使いでいきなり話題を変えたり、人の話に割り込んだりすることも可能であるから、とりあえず、他の要素を対象からはずきないと、言語形式自体の丁寧度の体系化ができなくなるからである。特に日本語のような敬語体系を有する言語においては、例えば、「食べるかどうかを尋ねる」という同じ「発話内容」が、相手や場面に応じて、「食べる?」「食べますか?」「召し上がる?」「召し上がりますか?」等の異なる丁寧度を持つ形式によって表現されるのであり、そのような使い分けの体系化こそが、これまでの敬語研究の主たる対象になっていたからである。

しかし、お互いが心地よいかどうかという実際の「効果」

を問題とする語用論的ポライトネス研究においては、どうい
う状況でその発話が行われているのかという、「発話内容」
と無関係ではありえない「コンテクスト」や、これまでの会
話の流れがどうであったのかというような、「発話の切り出
し方」が適切かどうかにかかわる「談話レベルの現象」を、
ポライトネス効果にかかわる重要な要素の一つとして積極的
に捉えるということである。つまり、「食べる」の例で考え
ると、それまでの会話のやりとりの中で、「この料理は口に
あわない」など、暗に、「もう食べない」ことを表明してきて
いたつもりの際に、再度、「召し上がりますか?」と聞かれ
たのでは、いくら「召し上がる」という尊敬語を使われて
も、心地よくないだろう。

「談話のポライトネス」を対象とするこのようなアプローチに対して、そこまで対象を広げてしまうと、それは、「言語のポライトネス」の問題ではなくなるのではないかという疑問が出てくるかもしれない。確かに、そのとおりなのである。談話のポライトネスは、「言語のポライトネス」ではなく、「言語行動のポライトネス」を対象としていると捉えなければならぬ。「言語行動」は、文／発話行為レベルの「言語形式の選択の問題」（尊敬語を用いるか否か等）と、コ

ンテキストを考慮した発話内容、発話の切り出し方や、スピーチレベルシフト、話題導入の仕方や頻度等々の「談話レベルの現象」、すなわち、「談話行動」(discourse behavior)の双方を含む。

先の、「召し上がりますか?」の例のコンテキストを広げて、これを、料理がかなり残っている皿をさげてもよいかどうか確認したかったホストの発話であると考えたと、それまでのコンテキストから、「召し上がりますか?」より「おさげしてもよろしいですか?」を選択したほうがよりポライトだと考えられるだろう。そう考えると、ポライトネスは、確かに、「食べますか」「召し上がりますか」という言語形式の丁寧度のみを扱っているのではないが、「食べるか」と尋ねるか「さげてもいいか」と尋ねるかという「言語行動」の選択の問題にかかわっているものであり、「言語」に全く無関係になるわけではないのである。

適切な「言語行動」を選択するには、上の例では、これまでの会話の流れの中で、客が「もう食べない」ことを含意した発話があったかどうかなどを考慮しなければならぬということになる。それが、「談話のポライトネス」を考えると、このことであり、故に、「談話のポライトネス」を研究する

らである。また、特に言語学者の中には、「ポライトネス」を「言語表現」の問題を超えて扱うという発想が少ないこともある。「ポライトネス研究」へのアプローチが複数あっても構わない。しかし、筆者は、これからの「ポライトネス研究」への重要なアプローチの一つは、「ポライトネス」を「対人コミュニケーション行動」の一つと捉え、「相互作用」「ダイナミクス」「相対性」という三つの観点を中心に、体系化していくということであると考えている。

その第一歩として提出されたのが、「ポライトネスの談話理論構想」(宇佐美、三〇二)である。そこで、改めてまとめられた「デイスコース・ポライトネス」(DP)という概念は、ここ一〇年の間に筆者が行った実証的研究における結果に基づいて、常に主張してきたことを、研究結果として提示するだけではなく、改めて「概念的」「解説的」にもまとめ直したものである。

筆者が、実験心理学を勉強している時には、指導教官から、「実証的研究というものは、基本的に仮説を検証する形を取るのだから、〔実験〕結果」を明確に示すことで、おのずと仮説の適否、すなわち、自説を示せるはずであり、また、そういう研究を目指すべきである。つまり、言葉を変え

ということとは、おのずと、「言語行動」をその研究対象とするということにつながる。つまり、ブラウンとレビンソンの「文/発話行為レベルのポライトネス理論」でも既にそうであったが、「談話のポライトネス」の研究をするということとは、おのずと、従来の言語学の枠内に留まらない「対人コミュニケーション研究」の一部へと広がっていかざるを得ないということの意味するのである。

二 「デイスコース・ポライトネス」(DP)という概念が生まれるまで

「談話のポライトネス」研究の重要性を指摘する人が増えてきていることは、先にも述べた。また、発話連鎖のケース・スタディ的分析から、談話のポライトネスに言及する類の研究も増えてきている。しかし、「談話のポライトネス」を、対人コミュニケーション行動として捉え、本格的に理論化、体系化しようとする試みは、これまでほとんどなされてこなかったと言っても過言ではない。

その理由の一つは、単純ながら、「文/発話行為」より、「談話行動」を対象とするほうが、扱う要因も多く複雑になるため、理論的に整理・体系化することがより困難であるか

れば、「考察」などの部分で、長々と解釈や説明をするのは、むしろ、結果が不明瞭だということを露呈しているようなものである。その研究の質の低さを表しているようなものである」と聞かされた。実際には、結果がそれほど明確に出るような研究を計画・実行することは、非常に難しいということを感じてはいるが、基本的には、実証的研究というものは、そうあらねばならないと考えている。

しかし、その後、特に、言語学関係者との様々な交流を通して、心理学における「常識」が通じないことが多いことを痛感している。これは、各学問領域の方法論上の問題になり、様々な観点から議論ができるところであるが、ここでは、これ以上触れない。ただ、言語学関係の読者が多い時には、「結果」を数値に変換して提示しただけでは、それを通して主張しなかった「自説」がほとんど伝わらないと言っても過言ではないということ、これまでの交流から感じざるを得ない。むしろ、「結果」の部分は飛ばして、「考察」の部分の解釈や説明、すなわち、文章化した説明部分だけが読みたいという「本音(?)」を聞いたこともある。それも一理あると思う。解釈がわかりやすく文書化してあれば、読みやすいし、納得もしやすくなるだろう。(但し、実験心理学的

観点からは、いくら解釈や説明が興味深く、納得しやすいものであっても、それを裏付ける「データ」が明確に提示されていなければ、その解釈は、単なる「意見」に過ぎないのであるが……。

ここで、改めて言っておきたかったことは、「デイスコース・ポライトネス」(DP)という概念は、今、突然概念的にできあがったものではなく、一九九二年以降、筆者が、予備研究的なものも含めて、一連の実証的研究を行い、仮説検証、修正を繰り返してきた中で、確立されてきたものであるということである。「談話のポライトネス」が重要だという「発想」は、当然、一九九二年以前からあったが、その「発想」を、実証的研究の中で検証・修正・発展させてきたのが、九二年以降だということである(そのまとめは、USAMI (2002)を参照)。

このことを強調するのは、これまで、特に、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の初版が一九七八年に出版されて以来、それに触発される形で、ポライトネスを扱った研究がかなり増えたと言われているが、その多くは、個別言語のポライトネスや敬語の原則の「規範」に基づいてその言語の特徴を論じるようなものであり、これまでに解説してきた

ように、一個別言語の少数の規範的例に基づいて、ブラウンとレビンソンの理論全体まで批判しようとしたような無謀なものも多く、意外にも、堅実な「実証的データ」に基づく研究が少ないことが、大きな問題として指摘されてきているからである(Thomas 1995: 宇佐美、一九九六、二〇〇一)。

「デイスコース・ポライトネス」(DP)は、本稿の一節でも述べた一般的な用語としての「談話のポライトネス」と、同義ではない。もちろん、広い意味での「談話のポライトネス」には相当するが、「デイスコース・ポライトネス」(DP)とは、これから五回に渡って提示していく「デイスコース・ポライトネス理論」(宇佐美、二〇〇二)の枠組みの中で定義された固有名詞である。以下に、まず、その定義を記しておく。

三 「デイスコース・ポライトネス」(DP)とは、どのような概念なのか

「デイスコース・ポライトネス」という概念は、主に、以下の三つの着眼点から生まれた。

- ① 発話効果としてのポライトネスは、談話行動から見えていく必要がある。

② 敬語を有する言語とそうでない言語等の、各言語に固有の特性を超えた共通の枠組みでポライトネスを比較・検討するためには、「ポライトネス」を、「言語形式の丁寧度」や「言語表現としての丁寧さ」に影響されやすい

「一文、一発話行為レベル」や「いくつかの発話連鎖レベル」というような短い談話レベルで捉えるだけでは不十分である。

③ 今後、ポライトネス理論をより普遍的なものへと発展させ、「相互作用」「相対性」「ダイナミクス」を体系化していくためには、「総体としての談話それ自体」を、ポライトネスを規定する変数の「つ」に加えて考えるという「デイスコース・ポライトネス」(DP)という捉え方を導入することが必須である。

「デイスコース・ポライトネス」は、以下のように定義する。「デイスコース・ポライトネスとは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である。」(宇佐美、一九九六、二〇〇二等)

次回からは、「デイスコース・ポライトネス理論」の構成

や概念を、順次、身近な例をあげながら解説していく。

【注】

「ポライトネスの談話理論」と「デイスコース・ポライトネス理論」は、共に、宇佐美提唱の理論を指す用語として用いている。

【引用文献】

- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: New York: Longman. (トマス (1998) 敬語亮一監修、田中他訳「語用論入門」研究社出版)
- 宇佐美まゆみ (一九九六)「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析—対話相手に応じた使い分けという観点から—」『学苑』六七、昭和女子大学近代文化研究所、三〇—四三頁
- 宇佐美まゆみ (一九九七)「ね」のコミュニケーション機能とデイスコース・ポライトネス」『女性のことば—職場編—』現代日本語研究会編、ひつじ堂房、二四—三六頁
- 宇佐美まゆみ (二〇〇二)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』第七回国立国語研究所国際シンポジウム報告書、国立国語研究所編、凡人社、九—三六頁
- USAMI, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.

(東京外国語大学外国語学部)

言語社会心理学・日本語教育学)

[連載]

ポライトネス理論の展開

宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)

⑧

ディスコース・ポライトネス理論構想(2)

——発話行為レベルの絶対的ポライトネスから
——談話レベルの相対的ポライトネスへ

一 「発話効果としてのポライトネス」を「談話レベル」で分析するとは、どういうことか

「ディスコース・ポライトネス理論」(以後、DP理論)の具体的な内容に入る前に、ここで、改めて、発話の「形式」ではなく、発話の「機能や効果」を、談話レベルで分析するということはどういうことかを押さえておきたい。

これは、その大枠を、野球にたとえて説明することができ。従来からの「文/発話レベル」における「言語形式の丁寧度」を問題とする捉え方は、ある会話の中で、「すごいですね」と言ったか、「すげえ」と言ったかを比較し、それを「丁寧な言い方」だとか「ちよつとくだけすぎた言い方」だというように位置づけることであり、野球で言えば、各々の打席の結果を問題にしているようなものと言える。つまり、野球の「ヒット」を、それが、「クリーンヒット」であるか「ボテンヒット」であるかというように形に着目して、それを、「胸がすくような」とか「かつこ悪い」ヒットだと評価するということに当たる。クリーンヒットのほうが、ボテンヒットよりも格好がよいとする評価は、「行く」よりも「いらつしやる」のほうが「丁寧だ」とする「文/発話レ

ベル」の捉え方に相当し、「絶対的な」捉え方だと言える。

一方、「効果」や「機能」を重視する語用論的な見方というのは、文字通り、「ヒット」の「形」より、「効果」のほうを重視する。つまり、胸のすくようなクリーンヒットであれ、まぐれな格好の悪いヒットであれ、打者が「一塁に進んだ」という「効果(結果)」は、「同じ」であることに着目する。「すごいですね」と言おうが、「すげえ」と言おうが、例えば、「何かに感動した」ということを伝えたという「効果」は、同じであるとする。これが、「形式」に着目するか「機能、効果」に着目するかの違いである。

さらに、発話の「効果」を「談話レベル」から分析するということは、野球においては、ヒットによって、「その打者が一塁に進んだかどうか」だけではなく、その前の打者が塁に(何人)出ていたか、その「ヒット」によって、得点(何点)得られたかなども、しっかり考慮することになる。それによって、同じヒットといっても、そのゲームにおける「効果」は、大違いだからである。

ボールではない言葉のやりとりにおいては、これは、いわゆる「文脈」を考慮することになる。つまり、「すごいですね」あるいは、「すげえ」という発話の前後にどのよ

うなやりとりがあったかということも考慮に入れた上で、当該の一つの発話の効果明らかにする。例えば、ある人が口にした「すげえ」が皮切りとなって、その後、他の会話参加者も何らかの形で「感動した」ことを伝える言葉を次々に口にしたか、そうでないかというような会話の展開によって、同じ「すげえ」という一つの発話の機能、効果が異なることに着目し、その流れを分析対象とするのである。これが、「談話レベル」からの分析である。

ブラウンとレビンソン(以下、B&L)の「ポライトネス」の定義は、簡潔に言えば、「人間関係を円滑に保つような言語行動」である。そうすると、その後の皆の会話を盛り上げたと考えられるこの例の「すげえ」という発話は、十分に「ポライト」であると捉えることができる。これは、これまでも説明したとおりである。しかし、DP理論は、このようないくつかの発話連鎖というような短い談話レベルの要素だけではなく、より「グローバル」な観点から見て、「談話」そのものを「変数」として、理論に組み込む。

二 「DP理論」が組み込んだ新たな要因とは何か

先に野球になぞらえて説明した例は、一般用語としての

「談話のポライトネス」を考えることに通じる捉え方である。しかし、DP理論は、これまで例に挙げてきたような談話レベルからの言語行動の捉え方に、さらに新たな要因を加えてポライトネスを考える全く新しい見方であるということを、ここで改めて強調しておきたい。

そのことを、例をあげて説明する前に、再度、固有名詞としての「デイスコース・ポライトネス」の定義を記しておく。「デイスコース・ポライトネス」とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である。」(宇佐美、三〇二等)

つまり、このDP理論の新しい視点の一つは、ポライトネスを、「言語行動のいくつかの要素がもたらす機能のダイナミックな総体」として捉えるということにある。そして、そのように捉えたポライトネスを「デイスコース・ポライトネス」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。DP理論が新たに組み込んだ、これまでのポライトネス研究では扱われていなかった観点とは、「デイスコース・ポライトネス」を構成する諸要素の当該談話に占め

る比率や諸要素各々のふるまいの総体を、当該談話の「無標ポライトネス」(次回以降に詳述)としての「基本状態」(base)という一変数として捉えるということである。つまり、DP理論では、デイスコース・ポライトネスには、「基本状態」があることを想定し、実際の発話効果としての「ポライトネス効果」は、その「基本状態」を基にして、相対的に生まれてくるものであると捉えるのである。

ここで、再び、野球の例えに話を戻そう。従来の「談話レベル」からの分析というのは、野球では、ある「ヒット」の効果も、その前後の文脈を考慮して、得点をあげたヒットのほうで、得点に結びつかなかったヒットより、効果が大きいと判断するような場合に相当する。つまり、文脈を考慮してはいるが、それは、自分ひとりのヒットか、前の打者がホームに戻って得点をあげたか、あるいは、次の打者のヒットによって、自分が得点をあげることができたかというような、せいぜい当該の打者の前後いくつかの打者の動きを考慮して、当該の「ヒット」の効果を捉える見方である。これは、談話のポライトネスの研究では、「依頼発話」自体の前に、前置きなどがあるか否かなどを考慮して、当該の「依頼発話」のポライトネスを考えるとこのようなことに相当する。

しかし、DP理論では「文脈(context)」を、「ローカル」なものと、「グローバル」なものの二通りに分けて考える。

これまでに例に挙げた文脈は、ローカルなものであるが、DP理論では、このような「発話連鎖」という比較的短い談話レベルのやりとりを考慮するだけではなく、もっと大きなグローバルな文脈として、その談話全体の「基本状態」を考慮する。すなわち、野球で言うと、当該打者の規定打席数を満たした上での「打率」を考慮するというようなことが、それに当たる。

大リーグで活躍中のイチローの例が、DP理論的観点からポライトネス効果を捉えることを理解するのに最もよいだろう。イチローのヒット一つひとつは、「形」としては、決して格好がよいとは言えないものが多い。普通ならアウトになるような内野ゴロが、イチローの俊足によってかろうじてヒットになっている場合が多い。しかし、形ではなく、機能、効果の観点から見ると、一塁に進んだという効果は同じ。ヒットはヒットである。また、打点をあげたかどうかを見れば、その効果の度合いも分かる。ここまでは、通常の、発話の「機能、効果」の「談話レベル」からの分析に当たる。

しかし、イチローの打席を何度も何度も繰り返し見ている

と、最初のうちは格好悪く見えた、打ちそこないのような内野安打が、決して胸をすくようなクリーンヒットではないにもかかわらず、美しくさえ見えてくることもあるということに気づく。これは、イチローが常に三割五分前後という驚異的な高打率を維持しているという事実を知り、それを無意識的にせよ、おのずと考慮に入れて見ることから生じる効果である。つまり、一つひとつのヒットも、その打者の「打率」という、より総合的な基準に照らし合わせて判断されるのである。「このようなヒットを積み重ねることによって、あの高打率が維持されているのだな」と考えると、目の前の一見打ちそこないのように見えるヒットも、意味あるものに見えてくるというものである。つまり、そのヒットで塁に出た、あるいは、打点をあげたというようなローカルな効果に加えて、「三割五分の打率を維持、向上させる一要素」というグローバルな観点からの効果も、その一ヒットに加わるのである。この各々の打者の「打率」にあたるものが、DP理論において想定する、各々の「談話」における「基本状態」である。DP理論においては、B&Lのポライトネス理論ではあまり扱われていなかった、相互作用における人間の「解釈」のプロセスの部分にも、一歩踏み込むことになる。

三 「相対的ポライトネス」を捉えるとはどういうことか

この「基本状態」を想定すると、さらに、「効果」に関して、次のような「相対的」な捉え方が可能になる。話をイチローの例に戻す。人は、イチローのヒットの効果、三割五分の「基本状態」に照らし合わせて「解釈」する。故に、当該のヒット自体は格好が悪くても、高打率を維持する要素として意味を見いだされる面もある。その反面、今度は、何打席かをまとめた「打率」の「よしあし」の解釈は、客観的な打率の数字ではなく、イチロー自身の「基本状態」との比較において、捉えられることになる。つまり、イチローの打率が三割そこそことなってしまうと、人は、「最近、イチロー、打たないな」と解釈することになる。しかし、客観的には、三割の打率を維持することは、十分に「よく打つ」打者の証なのである。同じ大リーガーの新庄が打率三割も維持できれば、多くの人が、「最近の新庄は、よく打つな」と感動させることだろう。このように、同じ客観的数字が、その文脈によって異なる効果をもたらすことを、ここでは、「相対的效果」と呼ぶ。そして、発話の効果としての「ポライトネス」もこのように相対的に捉えていくことが、DP理論

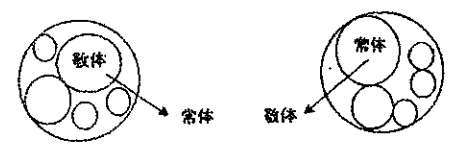
論の大きな柱の一つである。すなわち、同じ「言語形式」も、文脈によつては、全く異なるポライトネス効果を生むのである。それを端的に表す例を、次頁の図に示して説明する。

「デイスコース・ポライトネス」(DP)は、言語形式としてのスピーチレベル(敬語の有無等)だけではなく、適切なあいづちの打ち方や頻度、話題導入の頻度などの、様々な談話行動(要素)の機能の総体として構成されている。ただ、ここでは、便宜上、デイスコース・ポライトネスの一要素としてのスピーチレベルを例に取って説明する。

この図の「初対面の会話」におけるDPの一要素であるスピーチレベルの、無標スピーチレベル(大多数を占めるほう、後に詳述)は、「敬体」である。そのため、このデイスコースにおいては、「常体」の使用は「有標行動」(数少なく目立つ行動、後に詳述)となる。「有標行動」が、何らかの効果を生むというのが、「相対的ポライトネス」を扱う「DP理論」の基本的な考え方の一つである。理論的には、有標行動は、次の三通りの効果をもたらす可能性がある。①プラス・ポライトネス効果(この場合、親しみを表すポジティブ・ポライトネス等)、②ニュートラル・ポライトネス効果(ポライトネスの観点からはニュートラルな命題内容を強調

するなどの「言語的談話効果」等、③マイナス・ポライトネス効果(失礼だと感じさせたり、不愉快にさせる等)である。同様に、左の図の「友人・夫婦の会話等」という「デイスコース」では、逆に、「常体」が、無標スピーチレベルになる。そのため、これまでの言語形式の丁寧度から見たポライトネスの捉え方とは全く異なり、DP理論においては、この談話における「常体」の使用は、無標行動であり、十分にポライトであると捉える。逆に、この談話で「敬体」を用いる

例 「初対面の会話等」の「友人・夫婦の会話等」のデイスコース・ポライトネス(DP) (無標スピーチレベルは、敬体) (無標スピーチレベルは、常体)



無標スピーチレベルからの逸脱(有標行動)
(有標行動が特別の機能や語用論的ポライトネスを生む。)

注: ・外側の大門は、諸要素の総体としてのデイスコース・ポライトネスを表す。
・内側にある小門は、例えば、「あいづち」や「話題導入」の頻度など、DPの要素と考えられるものを想定し、象徴的に表したものである。その数は、上記のように5つとは限らない。
・小門のうち、矢印が出ているものは、各談話における「無標スピーチレベル」を表している。

図 特定の「談話(活動の型)」における無標ポライトネスとしての「デイスコース・ポライトネス」

ことは、この談話の無標スピーチレベルである常体を使用していないという意味で有標行動となる。有標行動は言語形式の丁寧度とは反対に、ポライトではない、マイナス・ポライトネス効果を生むこともある。このことは、DPの基本状態における無標スピーチレベルが常体である談話(つまり、通常、常体を使っている人や場面での会話)では、例えば、夫婦間における敬体使用(「お早いお帰りますこと」等)は、丁寧というよりも、皮肉を述べる時やけんかの際に用いられるという日常生活の観察からも分かるだろう。

つまり、常体が無標である談話においては有標行動となる敬体の使用は、言語形式自体は、「敬体」であるにもかかわらず、失礼だと感じさせたり、不愉快にさせる等の「マイナス・ポライトネス効果」をも生み得るのである。

このように考えると、語用論的ポライトネスの効果を実質的に生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「デイスコース」の「基本状態」(この場合、無標スピーチレベル)からの離脱や回帰という、言語行動の「動き」であるということが分かるだろう。これが、「相対的ポライトネス」を捉えるということである。

(東京外国語大学外国語学部/言語社会心理学・日本語教育学)

ポライトネス理論の展開

pp98-103

宇佐美まゆみ

(うさみ まゆみ)

⑨

ディスコース・ポライトネス理論構想(3)

—無標ポライトネスという概念—

—「無標ポライトネス」とはどのような概念か

言語形式について言うなら、行く、いらつしやる、においてになるという順に丁寧度が高くなる。その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、よりポライトであるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っている。それが二〇世紀の語用論が対象としたポライトネスであったとも言える。しかし、慇懃無礼な言語行動や、いつも「ため口」で話す相手に「敬語」を使って「宣戦布告」をするというような言語使用と、それが生み出す実質的效果については、「相対的ポライトネス」という概念を取り入れなければ説明できないということを、前回論じた。今回は、さらに、「発話効果としてのポライトネス」を体系化するために、「無標ポライトネス」という概念を導入する必要があるということを論じる。

本連載の前半で解説したブラウンとレビンソン（以後、B&L）のポライトネス理論に対しては、的外れな批判が多すぎて、かえって重要な問題点が見えにくくなっていると言っても過言ではない状況である。そういった中で着目すべき問題点の一つに、B&Lのポライトネス理論におけるポライ

トネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす行為（FTA: Face Threatening Act）を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度（FT）を軽減するためにとるストラテジー」として捉えられているために、「日常会話」（ordinary conversation）などのように、一見

FTAがないように見える会話における「ポライトネス」をうまく説明できないという点がある。つまり、我々の日常生活には、FT軽減行為とは異なるタイプのポライトネスもある。それは、「守られていて当たり前で、期待されている言語行動が現れないときに、初めてそれがないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。

筆者は、このような一見FTがないように見える日常会話におけるポライトネスも併せて、より体系的にポライトネスを捉えるためには、ポライトネスを、「有標ポライトネス」（marked politeness）と「無標ポライトネス」（unmarked politeness）とに分けて考える必要があると考えている（Usami, 1999, 2002）。この観点から考えると、B&Lのポライトネス理論は、有標ポライトネスについての理論であると言える。

しかし、少し視点を変えて考えると、私たちの日常生活に

における対人コミュニケーションにおいては、何かのために特別にポライトになるというよりは、むしろ、常に、失礼のないように配慮することが基本になっていると捉えることもできる。つまり、特別にポライトというわけではないが、失礼ではないという状態を保つのである。このような、ある言語文化における特定の状況（談話）ごとに暗黙のうちに共有されている「守られていて当たり前な、失礼のない状態」としての「談話」の総体を、「無標ポライトネス」と捉える。

敬語使用もかりである。敬語を使って、特別にポライトになろうとする場合もあるが、むしろ、人は通常、敬語を使わないと「失礼になってしまう」ことを恐れて、適切な敬語を使おうと努力しているとも言える。つまり、実質的には、丁寧だというよりは「ニュートラル」なものとして捉えられている「敬体（です・ます体）」や、使用頻度の高い尊敬語や謙譲語の使用は、もちろん場面にもよるが、発話の総体としての「無標ポライトネス」を構成している要素と考えられるのである。

二 DDPの「基本状態」（default）とは何か

「ディスコース・ポライトネス」（DDP）という用語は、談

話の諸要素が語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスを指す。「デイスコース・ポライトネス」とは、ある特定の場面・状況における談話の総体としての「基本状態」(「D Pの基本状態」と言う)を指す。また、同時に、その談話のデイスコース・ポライトネスを構成している各要素の「基本状態」をも表す。D P理論では、この「談話の基本状態」を「無標ポライトネス」と捉える。すなわち、「基本状態」には、無標ポライトネスとして認知されている「発話の総体としての談話」の基本状態、および、その「談話内の各要素」の基本状態の二種類があるということである。

例えば、「特定の友人との電話での会話」が、全体として「不愉快だった」とも「特に丁寧だった」とも感じられず、いわゆる「普通の、いつもどおりの」会話だと感じられた場合、その「特定の友人との電話での会話」というあるまとまりをもった「談話」の総体が「D Pの基本状態」であり、また、その談話における言語使用の一要素としての「敬体の使用率」や、「あいづちの頻度」等々が、その談話を構成する各要素の「基本状態」である。

ここで、再び、大リーガーのイチローを例に取って考えてみよう。「デイスコース・ポライトネス」とは、イチローの

プロ野球選手としての「実力の総体」のようなものである。イチローの実力を最もわかりやすく示すものは、まずその「打率」の高さであろう。しかし、イチローの実力の総体を形作っているものは、打率の高さだけではない。その守備のうまさ、送球の速さなどもイチローの実力を構成する主要な要素の一つである。同じく、盗塁の多さも実力を構成する主要な要素であると言える。D P理論におけるある特定の場面・状況における談話自体の「基本状態」というのは、イチローの総合的実力の「平均的成績」に相当する。

つまり、「打率」という要素は三割六分前後、「打点」が〇点、「盗塁」は、年に〇回くらい、「守備におけるファインプレー」が年間〇回くらい、というような各要素それぞれの状態の総体が、イチローの総合的実力の「基本状態」を構成していると捉える。それと同時に、各々の要素にも「基本状態」がある。つまり、「打率」の基本状態は、三割六分前後、「盗塁」の基本状態は年〇回という具合にある。これらの要素の中のどれかひとつでも、これまでのイチローの平均的成績より目立って悪ければ、すなわち、基本状態を満たしていなければ、人々は、まず、「イチロー、最近さえないな」と「漠然と」感じるようになるだろう。その原因をつきとめ

なければ、イチローの「不調」の「時期」を、例えば、「九月の成績」というように区切って、それを、イチローの総合的実力を構成する各要素の「基本状態」と照らし合わせて見ればよい。そうすれば、「そうか。しばらく、ファインプレーが出ていないんだ……」などと納得するかもしれない。本来、ファインプレーは、普通よりすばらしいプレーを言うが、イチローの場合、幸か不幸か、例えば、何試合かに一回はファインプレーがあるというように「基本状態」が高いあまり、その基本状態に満たないと、別に、エラーが増えたわけではなくとも、「最近、さえない」と感じられてしまう可能性もある。これが、「相対的效果」というものであることは、前回説明したとおりである。

また、「デイスコース・ポライトネス理論」の捉え方の説明に、イチローを例として大変興味深く、まさに、D P理論の核心にも通じるところがあると感じる点は、「年間のホームランの数」が、イチローの総合的実力を構成する要素としては、それほど重要ではないという事実である。野球においては、ホームランは華である。普通は、それが打者の実力の主要な指標の一つになり、人気を左右する重要な要素にもなる。しかし、言うまでもなく、野球は、ホームランだけでは

ない。これは、ポライトネスならずとも、日常の出来事の数々は、ローカルな観点からではなく、より総合的なグローバルな観点から解釈されるということの好例であろう。つまり、ローカルに見れば、(文レベルで見れば)、イチローのポテンヒットは、とうていホームランに、かなわない。しかし、グローバルに見ると(談話レベルで見ると)、イチローのポテンヒットの積み重ねによる高打率の維持や、守備や盗塁での素晴らしいプレー、それらの「総体」の評価が、イチローが最高の得票率を得てオールスター戦に選ばれるという結果となって表れていると言えるのである。つまり、言語行動で言えば、文レベルで、最も丁寧度の高い敬語を駆使しさえすれば、円滑なコミュニケーションが促進できるとは限らず、適切なあいづちやスピーチレベルのシフト操作など、談話レベルの諸要素の機能の総体こそが、相手に与える印象や、円滑なコミュニケーションの促進に功を奏していると言えるのである。

D P理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネスを相対的に捉えるために同定する必要があるものであると捉える。つまり、イチローの打率のよしあしは、「基本状態」としてのこれまでのイチロー自身の実績を基にして判断され

る。同様に、DP理論では、ポライトネス効果は、各々の言語行動の「基本状態」を基にして、そこからの「動き」に着目することによって、相対的に判断される。基本状態を構成する言語行動を「無標行動」と呼び、基本状態から離れた言語行動を「有標行動」と呼ぶ。有標行動と有標ポライトネスは、別次元のもので、有標行動が、必ずしも有標ポライトネスになるとは限らない（後に、詳述）。DPの基本状態は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。つまり、基本状態を構成する諸要素は、あつて当たり前のものとしてDPを形作っていると考え、その中の何かが欠けると（あるいは、何かが多すぎると）、それが意識され、ポライトでないことと認知されると想定するからである。

三 各々のDPの基本状態をいかに同定するか

これまででは、「初対面の会話」や「夫婦の会話」などにおいて、前者では敬体が、後者では常体が基本状態であるというように、スピーチレベルの「基本状態」が直感的にも想定しやすい「活動の型」を例にあげて話を進めてきた。しかし、DP理論では、活動の型にとその基本状態が固定的に決まっているものだと捉えているのではなく、あくまでも、

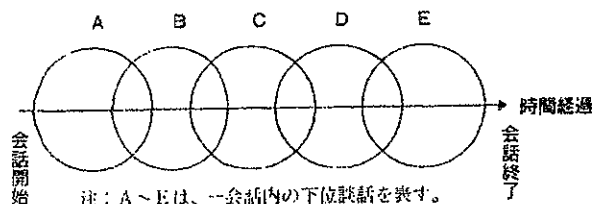


図 会話における時間経過と下位談話のDPの基本状態の同定方法

て集計すれば、その構成比は、同定できる。しかし、若い友人同士の初対面の会話などでは、例えば、一会話内でも冒頭部と終了部では、言語使用に変化が見られると予測される場合がある。そういう場合は、下位談話に区切って、下位談話であるAとEのそれぞれのDPの基本状態を同定し、Aの談話内における語用論的ポライトネスは、Aの談話の基本状態からの動きで解釈し、Eの談話内における語用論的ポライトネスも同様にEの談話の基本状態からの動きで解釈するのである（B、C、Dも同様）。例えば、まだ敬体が基本状態である会話の冒頭部Aで、「～する？」などの常体が用いられると、それは有標行動となり、「心的距離を縮める」という効果を生むかもしれない。しかし、だんだん打ち解けてきた、既に常体の比率が増えてきた

基本状態を基にして、そこから相対的にポライトネス効果を抑えようとしているのである。つまり、場面や状況というのは、個人の話し方がある程度規定する面はあるものの、全面的に個人の言語使用を決定するものではなく、むしろ、個人の言語使用が「事象」を形成していくと捉えるのである。故に、ある特定のディスコース・ポライトネスの基本状態は、理論的には、「初対面の会話」というような活動の型のみによって規定されるものではなく、個々の会話ごとに、話者間で交渉されつつ形成されていった「談話」を実際に分析することによって、はじめて同定できるものと捉える。その例を以下に示す。

次頁の図は、一会話の開始から終了までの時間経過と下位談話の捉え方を図示したものである。A～Eは下位談話を表すが、その区切り方は、目的に応じて、話題ごとにまとめてもよいし、例えば一〇分ごとのように時間で区切ってもよいだろう。例えば、「社会人の初対面の会話」というくらいに大まかに活動の型を捉える場合は、図のAからEの談話すべてを含む会話開始から終了までのすべてを対象として、その会話のDPの基本状態を同定すればよい。仮に、スピーチレベルの場合を例にとると、すべてのスピーチレベルを分類し

談話Eで、「～する？」などの常体が用いられても、それはもはや無標ポライトネスとなっており、特別の効果は生まれなくなる、というように解釈していくのである。

このようなDPの基本状態の同定方法について、談話の選定方法や下位談話の区切り方などを、どうしたらよいのかという疑問が生じるかもしれない。しかし、それは、各々の研究者が、興味や目的に応じて判断すべきことである。話を再度、イチローの例に戻して答えると、イチローのこれまでの実績全体を評価したのであれば、これまでの通算打率、打点、盗塁数などを考慮すればよいし、先の例のように「最近、調子が悪いと感じる原因は何か」を知りたいのであれば、「最近の（例えば、二〇〇二年九月のみの、あるいは、ここ二週間の）」成績を分析すればよいのである。

今回は、マイナス・ポライトネス効果としての「インポライトネス（不快・失礼）」について論じる。

【引用文献】

USAMI, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo. [Harvard 大学に提出された同名の博士論文 Usami (1999) に加筆・修正を施したもの]

（東京外国語大学外国語学部／言語社会心理学・日本語教育学）

【連載】

ポライトネス理論の展開

宇佐美まゆみ

(うさみ まゆみ)

10

ディスコース・ポライトネス理論構想(4)

—DP理論の骨格—

一「DP理論」における「ポライトネス」の捉え方の
まとめと展開

フラウンとレビンソン(以後、B&L)のポライトネス理論では、「ポライトネス」は、「円滑なコミュニケーションを確立・維持するための言語的ストラテジー」と定義されていた。その定義に表れている捉え方自体が、従来の言語学における「言語形式の丁寧度」としてのポライトネスの捉え方は言うまでもなく、言語学に新しい視点を持ち込んだ語用論における「言語使用の原則」としてのポライトネスの捉え方とも発想を異にする「斬新な」ものであったことは、これまで繰り返し論じてきた。

しかし、B&Lのポライトネス理論が、斬新な発想を含みながらも、なお抱えていた問題点を克服し、より普遍的なポライトネス理論を確立するためには、「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し、無標ポライトネスというものをポライトネス理論に取り込み、ポライトネスを相対的に捉えていく必要がある。無標ポライトネスの基本状態からの離脱や回帰という動きが、発話の効果としてのポライトネスを生むという「相対的ポライトネス」を対象としない限

り、真に文化的にバイアスのない「ポライトネスの普遍理論」を確立するのは困難だからである。

筆者が提唱する「ディスコース・ポライトネス理論」(以後、DP理論)においては、B&Lのポライトネスの捉え方を基本的に支持しつつも、新しい概念を導入し、扱う対象を拡大することによって、B&Lのポライトネス理論を、さらに拡大することになる。本連載では、残念ながら、DP理論で新しく導入する概念それぞれについて詳細を記す紙幅はない。それは、いずれまとめる予定の別稿にゆずりたい。

ここでは、前回、前々回に渡って解説してきたDP理論の鍵となる主要な「新概念」を箇条書き的にまとめておくに始める。談話内の諸要素の機能の総体としての「ディスコース・ポライトネス」、特別にポライト、というわけではなく、あつて当たり前であるが、それが欠如したときに初めてポライトでないといふと認知されるという「失礼でない状態」としての「無標ポライトネス」、無標ポライトネスを形成する諸要素、および、その総体としての談話の典型的な状態としての「基本状態」(default)、基本状態からの離脱や回帰という「動き」や、特定の談話における「非典型的な言語行動」としての「有標行動」などが新しい概念であった。

DP理論では、ポライトネスを、「有標ポライトネス」(marked politeness)と「無標ポライトネス」(unmarked politeness)とに分けて考える。この観点から考えると、B&Lのポライトネス理論は、有標ポライトネスについての理論であると位置づけられる。というのは、彼らは、基本的には、相手のフェイスを脅かす行為(FTA: Face Threatening Act)をやるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を軽減する (redress) ために」とる言語行動」をポライトネス・ストラテジーとして捉えているからである。

DP理論では、「FT (Face Threat) 度の軽減行為」は、一種の「有標行動」であると捉える。有標行動がもたらし得る効果には、①プラス・ポライトネス効果、②ニュートラル・ポライトネス効果、③マイナス・ポライトネス効果の三通りがある。談話レベルでニュートラル・ポライトネス効果を考えるには、先に説明した「無標ポライトネス」という概念が必要になる。B&Lのポライトネス理論では、③のマイナス・ポライトネス効果は、「FT軽減行為」としてのポライトネス・ストラテジーを行わなかった場合に自ずと生じる効果として含意されているとは言えるが、「円滑なコミュニケーション」を確立・維持するための言語的ストラテジー」と

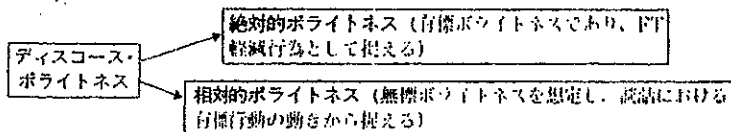


図1 ティスコース・ポライトネスの捉え方

いうB&Lのポライトネスの定義に表れているように、「ポライトでない言語行動」は体系的に扱われていないと言える。

そのため、「ポライトネス」という概念をさらに拡大して、先に説明した②のニュートラル・ポライトネス効果、③のマイナス・ポライトネス効果をも、ポライトネス理論の枠組みで統一的に扱おうとするのが、DP理論である。すなわち、ある言語使用がもたらす対人効果を、プラス・ポライトネス効果、ニュートラル・ポライトネス効果（言語的談話効果等）、マイナス・ポライトネス効果（言語的談話効果等）で体系的に捉えることによって、「マイナス・ポライトネス効果」、「すなわち、「失礼・不快」も、DP理論の枠内で包括的に説明する。

二 DP理論におけるポライトネスの再定義

以上のように考えると、発話効果としての「ポライトネス」は、さらに、操作的に、以下のように定義することもできる。すなわち、「ポライトネス」とは、「人間の相互作用において言語行動がもたらした対人コミュニケーションにおける効果を、快・不快の観点から表す指標である」。次頁の図

1は、この定義がより明確になるような形でこれまでに触れた「ティスコース・ポライトネス」の捉え方を整理したものである。

ティスコース・ポライトネスは、発話、および、その総体としての談話のポライトネスを、絶対的ポライトネス、相対的ポライトネス双方の観点から捉える。「有標ポライトネス」は、B&Lが扱ったFT軽減行為としてのポライトネスであり、一種の「絶対的ポライトネス」として捉えられる。お金を借りるなどの「依頼行為」や「断り行為」など、明らかにFTA（フェイス侵害行為）だとみなされる「発話行為」が、その典型である。しかし、DP理論では、「無標ポライトネス」という概念を導入し、「相対的ポライトネス」を「有標行動」の効果として捉えるという新しい発想を導入する。すなわち、「ティスコース・ポライトネス」は、あいづちや話題導入の仕方や頻度など談話内の諸要素が、円滑なコミュニケーションとしてのポライトネスに果たす役割の総体として捉えられ、発話行為レベルでも捉えられる「絶対的ポライトネス」と、談話レベルで捉える「相対的ポライトネス」双方を含むものである。

「絶対的ポライトネス」は、基本的には、B&Lが唱えた

ように、FT軽減行為としてポライトネスを捉えることでもかなり体系化できる。一方、「相対的ポライトネス」は、談話自体もパラメータを含む、談話レベルからしか捉えられない「ポライトネス」であり、無標ポライトネスとしてのDPの基本状態からの離脱や回帰という「有標行動」が効果を生むという捉え方によって、新たに体系化していく必要がある。

三 DP理論の適用の手順

ティスコース・ポライトネス理論の骨格を確認するために、次頁の図2にDP理論の適用の手順をフローチャート風にまとめる。

(1) 絶対的ポライトネスか相対的ポライトネスのどちらの観点から当該の発話を予測、あるいは、解釈するかを選定する。

(2) 依頼発話や断り発話などの特定の発話行為は、談話レベルで捉えても、FT軽減の度合いに応じて、「話し手と聞き手のFT度の見積もりのギャップが生む効果」（詳細後述）として、絶対的ポライトネスの観点から解釈できる。

(3) 総体としての談話の効果を考慮に入れた相対的ポライトネスを捉える場合は、まず、無標ポライトネスとしてのDPの基本状態を同定した上で、何が有標行動であるかを相対的な観点から明らかにする。

(4) 有標行動を同定した後は、その有標行動がどのような機能を生み出すかについて、「談話のコンテキスト」、「発話内容」を考慮に入れて考察する。

B&Lのポライトネス理論は、話し手中心で、聞き手との相互作用が体系化されていないという弱点があった。DP理論では、「発話効果としてのポライトネス」は、図2の左側にあたる「有標ポライトネス」の「実質的効果」として、「話し手と聞き手の、ある行為のフェイス侵害度（FT度）の見積もりのギャップ」によって算出されるものとする。ポライトネスの効果に、聞き手の観点を取り入れるのみならず、話し手と聞き手双方の捉え方のバランスを体系化した点

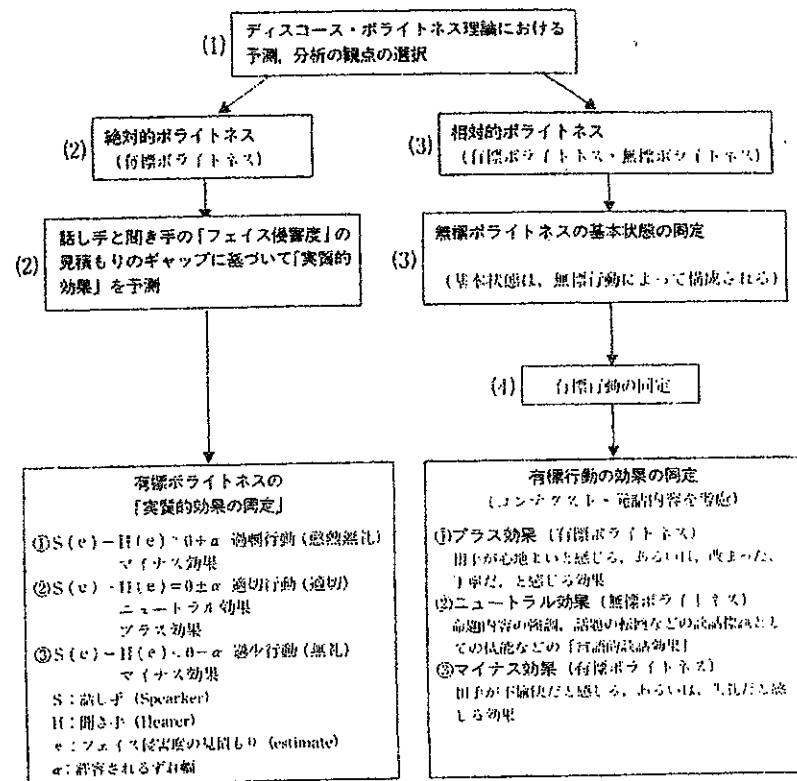


図2 ディスコース・ポライトネス理論の対象とその同定プロセス

が新しい。

図2の左側、有標ポライトネスの「実質的効果の同定」の中の①は、話し手のFT度の見積もりのほうが、聞き手の見積もり「+α」(許容されるずれ幅)よりも大きいことを表しており、「適切」な範囲を超えて、丁寧度の高い表現が用いられていることを示している。これを、「過剰行動」と呼ぶ。これは、「効果」の観点からは、「マイナス・ポライトネス効果」を生む。いわゆる「慈愍無礼」は、これに当たる。また、逆に、③の場合は、話し手のFT度の見積もりのほうが、聞き手の見積もり「-α」(許容されるずれ幅)よりも小さいことを表しており、「適切」な範囲を超えて、丁寧度の低い表現が用いられていることを示している。これを、「過少行動」と呼ぶ。これも、「効果」の観点からは、「マイナス・ポライトネス効果」である。それに対して、②は、話し手と聞き手の見積もりに、許容されるずれ(Hα)はあっても、

それは、ポライトネス効果には影響ない程度のものである場合である。これを、「適切行動」と呼ぶ。「効果」の観点からは、「ニュートラル効果」、あるいは、「自分の基準より少し丁寧だ(±αの範囲)、少し親しげだ(±αの範囲)」という感じ方をするという意味の「プラス効果」ということもあり得る。つまり、この公式が表しているのは、表現自体の丁寧度には、状況に応じた適切さというものがあ、それより高すぎても低すぎても、ポライトネス効果はマイナスとなるということである。このように、FT軽減行為として捉えた有標ポライトネスは、実質的効果としては、基本的に「ニュートラル・ポライトネス効果」と「マイナス・ポライトネス効果」しかないことになる。これは、もともと、相手のフェイスを侵害する行為を行うことを前提として、そのFT度を軽減することがポライトネスだとする捉え方を考えると当然であろう。

一方、図の右側に当たる有標行動が生み出す「相対的ポライトネス」の「効果」は、プラス・ポライトネス効果、ニュートラル・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果の三通りある。その効果は、「発話」であれば、談話のコンテキストや発話内容を考慮して同定する。また、当該の有標

行動が、あいづちの頻度などのような「談話行動」である場合は、その要素の「基本状態」との比較や、第三者の評定などによって、その「効果」を同定していく。プラス・ポライトネス効果とマイナス・ポライトネス効果は、「有標」か「無標」かという観点からは、双方とも「有標ポライトネス」であり、ニュートラル・ポライトネス効果は、「無標ポライトネス」の要素が生み出すと考える。

次回は、「マイナス・ポライトネス効果」は、話し手と聞き手のFT度の見積もりのギャップが生むというポライトネスの相対的な捉え方に、さらに「フェイス侵害行為」が「意図的」か、「非意図的」かという観点を取り入れながら、より具体的に解説していく。

(東京外国語大学外国語学部/言語社会心理学・日本語教育学)



【連載】

ポライトネス理論の展開

宇佐美まゆみ

(うさみ まゆみ)

11

ディスコース・ポライトネス理論構想(5)

—DP理論の展開—

—「ポライトネス値」という捉え方

ブラウンとレビンソン(以後、B&L)(一九七)で、それまでの言語学や語用論の定義とは異なる「ポライトネス」の新しい定義が、「F.T.A. (Face Threatening Acts) の見積もり」という具体的な操作概念とともに提出され、ポライトネス研究に新しい展望の可能性を開いた。しかし、「F.T. (Face Threat) 軽減行為」の観点からのみ捉えられた「ポライトネス理論」は、前回までに指摘したように、筆者が「無標ポライトネス」と呼ぶ「特別にポライトだとは感じないが、それがなくなると不愉快に感じる」という類のポライトネス、すなわち、別の言葉で言うところ、無標ポライトネスを構成する「無標行動」と、時として起こる「有標行動」の集合体が醸し出す「談話のポライトネス」をほとんど考慮に入れていなかった。よって、それらをも説明し得る体系的な理論にはなっていなかったと言える。

今回は、「談話のポライトネス」のみならず、「無標ポライトネス」、「相対的ポライトネス」という概念を導入して、より広い観点からポライトネスを体系化することを企図する「DP理論」の骨格を示し、その適用の手順の概略を簡単に

ポライトネス値(P値)

話し手と聞き手のフェイス侵害度 の見積もりのギャップ	行動の適切性	ポライトネス効果
① $1 \geq S(e) - H(e) > 0 + \alpha$	過剰行動(慥慥無礼)	マイナス効果
② $S(e) - H(e) = 0 \pm \alpha$	適切行動(適切)	ニュートラル効果 プラス効果
③ $-1 \leq S(e) - H(e) < 0 - \alpha$	過少行動(無礼)	マイナス効果

S: 話し手 (Speaker)
H: 聞き手 (Hearer)
e: フェイス侵害度の見積もり (estimate)
 α : 許容されるずれ幅

図1 「ポライトネス値」と「ポライトネス効果」

フローチャート化して示した。今回は、その中の「有標ポライトネス」の実質的効果の同定(二二月号二二頁、図二)の内容について、より詳しく説明する。

フローチャートにも描いた「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりのずれ」が生み出す「有標ポライトネスの実質的効果」の数式から得られる値である。ポライトネス値は、絶対値として算出できるわけではないが、「0を中心とする」1から11の数値で表される連続線上に分布すると考える。すなわち、前回の図を「ポライトネス値」を縦軸とする連続線で示すと、上の図1のようになる。

「DP理論」においては、「ポライトネス値」の「適切範囲」(上の図1の網かけ部)というものを想定し、それを、話し手と聞き手の「フェイス侵害度の見積もりの一致度」という観点から捉える。つまり、話し手が見積もる「フェイス侵害度」と、聞き手の期待する「フェイス侵害度」の差を、数値として表したものが、「ポライトネス値」である。「ポライトネス値」の「適切範囲」とは、話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりのずれ、すなわち、「話し手の見積もり」から「聞き手の見積もり」を引いた値が、「0」を含めた「0.44 (許容されるずれ幅)」以内に収まっている場合であり、図1の「0.44」の範囲で表される。この適切範囲を超えた「+」の値は、「過剰行動」、すなわち、「慥慥無礼」を

表し、同様に、適切範囲を超えた「一の値」は、「過少行動」、すなわち、「失礼、無礼」であることを示す。

例えば、依頼などのような明白な「フェイス侵害行為」を行うことは「有標行動」であると捉えられるが、このように、実際に「フェイス侵害行為」を行う場合には、「どのくらいのフェイス軽減行為が必要か」ということの見積もりの、話し手と聞き手との「差」でもある「ポライトネス値」が、「0.18」以内に収まらなければ、「ニュートラル・ポライトネス」の条件を満たさないことになり、「円滑でない、不愉快な」効果としての「マイナス・ポライトネス効果」を生むことになる（前頁図1の①と③）。ここでは、フェイス侵害度の見積もりに応じた言語行動が選択されることを前提としている。マイナス・ポライトネス効果には、もちろん、「言語形式は丁寧だが、どこか不愉快である」という「慇懃無礼」も含まれる。別の言葉で言えば、これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」とは、D P理論で解釈すると、「相手の言語行動が、こちらが当該の状況で適切であると考えた言語行動よりも、許容できるF.T.度の見積もりのずれ幅 α を超えて、「丁寧な表現」である」場合であるということになる。

一方、特に、依頼などの明確なフェイス侵害行為を行わない場合は、フェイス侵害度を軽減する必要もない状態、すなわち、特別にポライトでも失礼でもない「無標ポライトネス」の状態にあると言える。「無標ポライトネス」については、前回のフローチャート（20月号（三頁、図2））に示したように、「フェイス侵害度軽減行為」として捉えられる「有標ポライトネス」とは異なり、当該の談話の「無標ポライトネス」の「基本状態」を同定することによって、逆にはじめて明らかにする。「有標行動が生み出す相対的効果」としてのポライトネスのダイナミクスを、有標行動が生じたコンテクストや発話内容を考慮しながら説明していく。効果は、同じく、プラス・ポライトネス効果、ニュートラル・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果の三通りである。

二 DP理論での「マイナス・ポライトネス」の捉え方

これまで、日本語の研究においても、また、欧米の研究においても、「ポライトネス研究」と比較して、「ポライトでない言語行動」については、あまり研究が行われてきたとは言えなかった。ここで、「ポライトでない」言語行動と記したことからも分かるように、それは、「ポライトな言語行動」

との対比においても考えられるので、まず、「ポライトネス」の研究が進むのも当然であったとも言える。国内では、悪態や罵り表現など、主に、言語表現に重きをおいた「無礼な言語行動」に焦点を当てた研究もあるが（星野（二六四）、西尾（二六五）等）、いずれも、「無礼な言語行動」を「ポライトネス」という観点から、統一的、体系的に扱おうとしたものではない。一方、欧米では、九〇年代以降、「インポライトネス」（impoliteness）に焦点を当てた研究も増えてきており、それらの中には、B & Lのポライトネス理論と関連付けて論じられたものもあるが、未だ、体系化されたものはない。

DP理論では、先に説明したように、「インポライトネス（無礼）」は、話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりの差として算出された「ポライトネス値」が、「0.18より低い」までの数値で表される言語行動として捉えられる。

例えば、「相手の非に言及する」というような行為は、行為自体は、フェイス侵害度が非常に高く、絶対的な意味では、ポライトではあり得ない。しかし、DP理論で解釈すると、絶対的な意味ではポライトではあり得ない行為だからこそ、人は、もし、なるべく円滑に相互作用を行いたいのであれば、フェイス侵害度を軽減するストラテジーを選択するで

あろうと考える。B & Lの理論で言う「F.T.Aを行わない（この場合、相手の非には触れない）」というストラテジーを取るのが、相手のフェイスを最も配慮したストラテジーとなる。しかし、様々な状況・理由から、どうしても、「相手の非に言及する」という発話行為を行わざるを得ない場合、あるいは、行いたい場合にはどうするかという点、人は、相手との力関係（P）、社会的距離（D）、その場の状況（R）などから、「当該の相手に対して、この状況において、その非に言及する」行為の「フェイス侵害度の見積もり」を算出し、その度合いに応じて、相手の非をほめかすオフ・レコード・ストラテジーをはじめ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーなど、いくつかあるストラテジーの中から、その状況で最も適切だと判断したストラテジーを選択すると捉える。

すなわち、DP理論では、絶対的には、ポライトな行為ではあり得ない「相手の非に言及する」という行為も、「相手のフェイスをなるべく侵害しないように、なんらかのストラテジーを講じる」のであれば、それは、「フェイス侵害度」の「軽減行為」であり、ポライトネス・ストラテジーの一種であると捉える。つまり、「ポライトに、相手の非に言及す

る」という捉え方も可能なのである。そういう意味で、筆者は、特に、相手が大幅に約束の時間に遅れてきた場合や、約束を守らなかった場合などのように、相手の非が明白な場合などに、「相手の非に言及する」という行為自体を、「マイナス・待遇表現行動」(西尾、一九九六)であるとは捉えない。それは、むしろ、相手の行為に反応した正当な待遇行動であると言ってもよいかもしれないからである。非を言及された側も、その非自体は素直に認めるかもしれない。

そう考えると、この話者の一方が「相手の非に言及する」というような状況も、例えば、「二時間も待たされてしまったのだから、このくらい重い」というような「話し手のフェイス侵害度の見損もり」と、待たせた側である「聞き手の見損もり」とのずれという観点から捉えることができる。状況にもよるが、このような状況で、筆者の定義する「マイナス・ボライトネス効果」が生まれるのは、先に説明したように、「ボライトネス値」が、「〇」より小さい場合と、「〇」より大きい場合であるということになる。そして、ボライトネス値が、「〇」内である場合は、ボライトネス効果は、ニュートラルであると考えるのである。

つまり、話し手は、相手のフェイスを過度に侵害しないよう理論が十分に扱っていない点であり、DP理論が扱おうとする課題の一つでもある。

すなわち、厳密には、ボライトネスにかかわるすべての言語行動は、「意図的」なものか、「非意図的」なものかという二つの観点から捉えることができる。つまり、ある状況におけるある行為のフェイス侵害度は、意図的に、高くも低くも見積もることができる。これまで解説してきたように、フェイス侵害度の見損もりが、高すぎれば、それは、「慇懃無礼」になり、低すぎれば「無礼」になる。話し手は、自分の言語行動が、フェイス侵害度の見損もりに応じた言語行動より低すぎる、あるいは、高すぎると自覚していながら、あえて、その言語行動を選択することもできる。その効果は、当然、「マイナス・ボライトネス」になるだろう。

「意図的フェイス侵害行動」によるマイナス・ボライトネスは、従来、「罵倒・罵り表現」などと呼ばれてきたものにも通じるが、意図的に、「慇懃無礼」になる場合、つまり、言葉遣いは丁寧な場合も含まれる点が、従来の「罵倒・罵り表現」研究とは異なる。いずれにせよ、「意図的」に「フェイス侵害行為を行う」、あるいは、「フェイス侵害度軽減行為を行わない」選択をするということは、円滑なコミュニケーション

うに、適切に相手の非に言及し、聞き手も、例えば、「二時間も待たせてしまったのだから、このくらい言われても仕方がない」と自覚している範囲の言語行動がそれに当たる。ボライトネス値が「〇」より小さい場合というのは、聞き手のほうが、「いくら一時間待たせてしまったからと言って、(遅刻の理由がないわけではないのに) そんな言われ方をされては不愉快だ」と感じるような場合である。ボライトネス値が「〇」より大きい場合というのは、いわゆる慇懃無礼な場合であり、「当該の状況に見合わないことが明白な、丁寧すぎる、言い方で非に言及される場合、すなわち、丁寧な言葉でいやみを言われる場合など」ということになる。

三 「フェイス侵害行為」の「意図性」という捉え方

「マイナス・ボライトネス」を考える際に重要な観点は、これまでの「円滑なコミュニケーション」を前提とした「ボライトネス」とは違って、むしろ、「相手のフェイスを侵害するために、意図的に相手の非に言及する」場合を考慮する必要があるという点である。この点が、円滑なコミュニケーションのためのストラテジーとして捉えられ、相手のフェイスを保持するという観点から構築されたB&Lのボライトネ

ションのためのストラテジーとしての位置づけられたB&Lのボライトネス理論では、直接は扱われていない。しかし、筆者は、相手のフェイスを侵害する発話行為を意図的に行うという「意図的フェイス侵害行動」は、「ボライトネス行動」の対極にある「対人攻撃的(言語)行動」として、また、「非意図的フェイス侵害行動」は、「個人差」や異文化コミュニケーション場面における「文化差」に起因するものとして、あるいは、特定の文化における「対人配慮行動」の未習得を反映する行動として、それぞれ、DP理論の中で体系的に扱っていく必要があると考えている。

次回(最終回)は、「DP理論」のさらなる展望と課題を示すことによって、対人コミュニケーション理論としてのDP理論の可能性を考える。

【引用文献】

- 宇佐美まゆみ(二〇〇二)「談話のボライトネス・ボライトネスの談話理論構想」『談話のボライトネス』、第七回国立国語研究所国際シンポジウム報告書、国立国語研究所編、凡人社、九六頁。
西尾純二(一九九六)「マイナス待遇表現行動分析の試みー非礼場面における言語行動規範について」『日本学報』二七、大阪大学、七六頁。
星野命(二〇〇五)「あくたいたいもくたい考ー悪態の諸相と機能」『季刊人類学』二五巻三号。

(東京外国語大学外国語学部/言語社会心理学・日本語教育学)

【連載】

ポライトネス理論の展開



宇佐美まゆみ

(うさみ まゆみ)

12

〈最終回〉

ディスコース・ポライトネス理論構想(6)

——「対人コミュニケーション理論」としてのDP理論の可能性——

一 ポライトネス理論の展開——まとめ

これまで、十一回にわたって、ここ数十年のポライトネス研究、および、ポライトネス理論研究の展開をまとめてきた。前半の六回までは、二〇世紀のポライトネス研究を概観しながら、中でも最も包括的であるが、その影響力と比例するかのごとく誤解もされているブラウンとレビンソン(以後、B & L)のポライトネス理論の骨子を、誤解を解くべく解説してきた。しかし、残念ながら、約一年たった今でも、ワークショップで「ポライトネス」という用語の捉え方を異にする複数の分野の論者が、それぞれの分野における「ポライトネス」を論じるだけならまだしも、B & Lのポライトネス理論の理解が不十分なまま、それに安易に批判的な言及を加えるというようなことが起こっており、状況は未だ混沌を極めていると言わざるを得ない。

これは、ひとえに、「ポライトネス」という用語が、もたらす混乱とも言える。一部の人は、この用語の語源やこれまでの常識的な意味に縛られて、それを新たに操作的に定義して捉えることがどうしてもできないようである。伝統的な意味でしか「ポライトネス」を捉えられないが故に、言語形式の

丁寧度のみに関われず、ポライトネスを広く捉えようとするせつかくの言語学者の企図も、結局は、土俵(定義)の異なる他領域の研究者各々の常識的な「ポライトネス観」を拝聴するに留まり、結果として、肝心の「語用論」の流れの中で展開してきたB & Lの「ポライトネス」の捉え方の理解さえおぼつかなくしているというのが現状である。真の意味でのB & L後の展開は、まだまだこれからなのである。

そういう現状の中、本連載の後半では、筆者独自の「ディスコース・ポライトネス理論」の構想を展開してきた。新しく導入した概念も多く、紙幅の都合もあって、抽象的な説明にならざるを得なかった部分も多い。それらのより分かりやすい提示や説明は、また、別の機会に譲るしかないが、ここでは、以下の二点を、改めて強調しておきたい。すなわち、①ある現象の体系化・理論化には、事象を操作的に定義することが重要であるということ、②言語行動の背後にある動機・メカニズムとしての「普遍理論」は、表面に表れる言語行動・言語ストラテジーには文化差があるという事実となんら相反するものではないどころか、その違いをもパラメータに組み込んでいくべきものであるということ、である。

①の観点からは、まず、「ポライトネス」も操作的に定義

して考える必要があるということが言える。つまり、「ポライトネス」という言葉の原義や意味論の意味を問題とするのではなく、定義した内容に相当するものが「ポライトネス」であると捉えなければならぬ。B & Lの「ポライトネス」の定義を最も簡潔に表すと、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」であると説明してきた。これに対して、常識的に理解して、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動は、文化によって異なるではないか」と疑問に思う向きは、「操作的定義」の意味を再考されたい。B & Lの理論では、「ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスという二つの基本的欲求を満たすような言語行動」が、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」として操作的に定義されていると捉えなくてはならない。

また、②に関して例をあげると、例えば、多くの文化において、何かの機会に初めて会った人には、挨拶をする。表面に表れる行動は、お辞儀であったり、握手であったり、胸の前で手を合わせたりと文化によって異なる。言語表現も、「どうぞ、よろしくお願いします」、「お会いできて嬉しいです」などと、その原義は、言語によって異なる。このような「違い」に着目して、様々な文化における初対面の挨拶の言

語表現を対照的に記述していくことや、そこから各々の文化的価値観の違いを探っていくことなどは、比較文化的観点から意味がある。言語表現の「相対性」の追究の部分である。しかし、一方、言語行動の「普遍性」を追究することについては、このような表面に表れた言語・文化による相違の背後にある「共通性」を見出す作業である。つまり、上の例で言えば、しぐさや言語表現は違っても、「初めて会った人には、(敵対しないことを示すために) 何らかの挨拶行動をする」という点を、「普遍性」として抽出するのである。

二 「DP理論」のまとめと具体的研究例

「デイスコース・ポライトネス理論(DP理論)」の新しさは、B&Lのポライトネス理論が対象としていた範囲を談話レベルに拡大するとともに、ポライトネスを、「話し手と聞き手双方の相互作用の結果、認知される効果」として操作的に定義し、相対的に捉えるという点である。つまり、実質的なポライトネス効果を、「話し手と聞き手のフェイス侵害度(FI度)の見積もりのギャップ」として捉えた点である。(ここでは、話し手は、自身のフェイス侵害度の見積もりに応じて行動することを前提としている。つまり、故意に、見

積もりに相当しない言語行動をとる場合は、「意図的フェイス侵害行動」として別に扱っていくことは、前回説明したとおりである。)このように考えると、「円滑なコミュニケーション」とは、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりのずれが〇H₀」である状態(二月号参照)と操作的に定義することが出来る。また、別の操作的定義で言い換えると、「ポライトネス値」(十月号参照)の数学的意味での絶対値が、 α より小さい場合ということができる。

DP理論のもう一つの特徴は、「無標ポライトネス」というものを想定し、それを談話の「基本状態」として捉え、それに対して生じる有標行動の動きが、実質的ポライトネス効果を生み出すという捉え方を提示したことである。このように捉え方は、ポライトネスを「談話レベル」で捉えることに

よってはじめて可能になることである。

これまでに「デイスコース・ポライトネス」という捉え方を導入して、特定の談話の「基本状態」を明らかにしようとした研究には、以下のようなものがある。「社会人の初対面二者間会話」における相手の年齢に応じた「話題導入頻度」、「各々のスピーチレベルの頻度」、「スピーチレベルシフトの頻度」の「基本状態」など(宇佐美 2001, Usami 2002 で

概説)。また、未だケーススタディの段階ではあるが、社会人の初対面二者間会話における「冒頭部のあいづちの頻度」と「終結部のあいづちの頻度」の基本状態(宇佐美 一九九三)、「同僚との雑談における「ね」の使用頻度と会議における「ね」の使用頻度」の基本状態(宇佐美 一九九七)、「日本語、中国語の依頼談話における発話連鎖のパターン」の基本状態(謝 2000)などの傾向も、ある程度明らかになってきている。また、デイスコース・ポライトネスの観点から企図された研究ではないが、日本人同士、日本人と韓国人の初対面である第一回目の会話から、その後四回目までの日本語の会話を縦断的に分析した研究(小柳 2000)も、デイスコース・ポライトネスの基本状態の、回を重ねるに依じた変化を扱ったものとして見る事ができる。

三 「DP理論」と比較文化語用論

「DP理論」は普遍理論をめざすものである。しかし、これまで「文化の相対性」という観点に重きがおかれていた発話行為の文化差に関する研究も、DP理論によって、異なる観点から捉え直すことが可能になる。すなわち、「依頼」や「断り」など、これまで文化による違いが明らかにされてき

た研究も、DP理論の観点から見ると、異なる言語・文化における、「依頼談話」や「断り談話」の無標ポライトネスの「基本状態」が、それぞれ同定された研究とみなすことができる。それらの結果を単に文化差の記述として留めるのではなく、その基本状態からの動きがマイナス・ポライトネス効果をも生むという観点から再考することによって、各文化における、各談話の無標ポライトネスとしての「基本状態」が異なるという事実から生み出されている、異文化間ミス・コミュニケーションの原因解明へとつながっていくこともできる。

例えば、謝(2000)は、授業関連のプリントを借りることを依頼する「依頼談話」の日中比較研究において、日本語では、「依頼発話」が切り出されるまでに、「注意喚起」「見込みの確認」「補助ストラテジー」という発話連鎖を経るのに対して、中国語では、「注意喚起」の後、すぐに「依頼発話」に移るという結果を報告している。このような結果を踏まえると、もし、中国人日本語学習者が、「注意喚起」の後、すぐに「依頼発話」に移るという中国語の無標ポライトネスである発話連鎖を日本語に転移させた場合、日本人は、それを、唐突だとか、失礼だというように感じてしまう可能性もある。一方、中国語において、日本式の長い発話連鎖を伴う

依頼の仕方をしたら、それは、中国語においては有標行動となり、よそよそしいと感じられたり、何か他意があるのではないかと勘ぐられたりする可能性もある。

このように、「依頼の発話連鎖」というような特定の談話のDPの基本状態は、各々の言語・文化によって異なるという点を十分考慮に入れた上で、母語話者と非母語話者の相互作用を分析していくことによって、単に敬語の使い方が間違っているというような文レベルの現象を超えてある、「談話のポライトネス」の異文化間ミス・コミュニケーションの原因解明にもつなげていき、より円滑な異文化間コミュニケーションの確立に役立てることもできる。

四 「DP理論」の今後の課題

「DP理論」の今後の課題には、実証研究としての課題と、理論構築のための課題がある。

実証研究としての今後の課題は、まず、種々の言語における、様々な活動の型における「談話」の、無標ポライトネスとしてのDPの基本状態を同定していくことである。特定の談話の「基本状態」とは、その種の談話のいわゆる「典型」のようなものである。故に、様々な活動の型の談話における

「基本状態」を同定していく作業は、一見、「談話レベルにおける、社会言語学的規範や慣習に則した言語使用」の実態を明らかにしようとしているように見えるかもしれない。しかし、実は、その目的は、規範の標本を作ることではなく、あくまで、規範(DPの基本状態)からの離脱や同帰という「動き」に焦点を当て、その「基本状態」との関係から「相対的」にポライトネスを捉えていくためのものであるということを理解する必要がある。

理論構築のための課題としては、今後、発話効果としてのポライトネスを具体的に予測し、解釈・説明するためには、「有標行動」の「発話内容」が、相手に共感を示すものなのか、もしくは相手にけんかを売るようなものなのか、あるいは、単にその発話を強調したいだけなのか等々、発話内容と発話意図についても考慮していく必要があるということがあろう。DP理論の今後の課題には、大きくは、以下の四つの側面がある。(1)「発話内容」と「言語形式の丁寧度」の相乗効果の体系化。(2)有標行動の三つの効果(①プラス・ポライトネス効果、②言語的談話効果、③マイナス・ポライトネス効果)の同定と予測のプロセスの体系化。(3)「フェイス侵害行為」の「意図性」の体系化。(4)「発話連鎖が生むポライ

トネス効果」の体系化である。

五 「DP理論」の展望——対人コミュニケーション理論としてのDP理論の可能性

DP理論を模索するきっかけは、「ポライトネス」が、文レベルの「言語形式の丁寧度」に影響を受けやすい敬語を有する言語と、「社会言語学的規範、慣習に則った言語使用」が言語形式に表れにくく、話者の自発的ストラテジーが目立つ、敬語を有さない英語のような言語における言語使用の「実質的ポライトネス」を、真に同じ枠組みで比較・検討できる普遍理論を追究したいということだった。そのために、「デイスコース・ポライトネス」という概念を導入し、これまでのポライトネス理論の対象を、談話レベルへと拡大し、「相対的ポライトネス」、「無標ポライトネス」を扱う「DP理論」へと発展させてきた。

「話し手」のF程度の見積りに重きが置かれていたB&Lのポライトネス理論とは異なり、DP理論では、ポライトネス効果を「話し手と聞き手のF程度の見積りもりのギャップ」として捉え、人間の「相互作用」という観点をより明確に組み込んで、ポライトネスを相対的に捉えた。しかし、

「相互作用」というコミュニケーションのメカニズムを体系化し、よりダイナミックな理論を構築するためには、さらに、聞き手の解釈過程に焦点を当てた「関連性理論」のような捉え方も取り入れていく必要があると、今のところ考えている。

「DP理論」には、未だ解決しなければならない課題は多い。しかし、その課題は、これからの「語用論研究」、ひいては、「対人コミュニケーション研究」全体の課題でもある。すなわち、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という「動き」を、いかに体系化していくかという課題である。

【注】

ヨーロッパから見た「ポライトネス」、ワークショップ、社会言語科学大会 第三回研究大会(2012)

【引用文献】

本稿に引用した他の文献の詳細は、以下を参照されたい。
宇佐美まゆみ(2012)「談話のポライトネス・ポライトネスの談話理論構想」談話のポライトネス、第七回国立国語研究所国際シンポジウム報告書、国立国語研究所編、凡人社、2012年
USAMI, Mayumi (2012) *Precious Politeness in Japanese Conversation: Some Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo, Harvard Universityに提出された同名の博士論文、Usami (1989) に加筆・修正を施したもの

(東京外国語大学外国語学部/言語社会心理学・日本語教育学)